
手のひら

山田木理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手のひら

【Nコード】

N0372R

【作者名】

山田木理

【あらすじ】

過去を抱え、ひっそり森の中にすむ僕に妹ができた。
そして、時が動き出す。

君の手のひらがそっと肩に触れ、僕はほっとしたんだ。

「あゝるうゝ日、森のなあかあゝ」

しんと静まり返る森に僕の軽やかな歌声が響く。

「くまゝさゝゝんに、でえあゝあつたゝゝ」

森は僕の歌と共に吐き出された二酸化酸素を飲み込んで酸素をだしている。

冷たくて濃い酸素が体中の毛穴から入り込み、僕は体中で森から降り注ぐ命を感じていた。

酸素カプセルってやつはこんな感じなのかもしれない。

森林の香りと謳う芳香剤や入浴剤とは明らかに違う。

あの芳香剤のどの辺が森林なのか皆目見当がつかない。

なんてことを思いながらの散歩もべたな歌も僕の日課だ。

「花さゝくうゝゝゝ、もゝりいゝのゝみいゝゝちいいゝゝ」

この森は割と山奥だ。

熊はいても人間はあまり来ない森だ。

「くまさあゝゝんゝに、でゝゝ、あゝゝ、あゝゝ、？」

夏が終わり冬を待つ森は僕の歌を飲み込んだ。

1 (後書き)

これから始まります。
短いですが、どうぞよろしくおねがいします。

マキは僕の「妹」を見て顔を引きつらせている。

「生き別れの妹？」

「うん。そう。仲良くしてよね」

僕はマキに妹を紹介した。

「ナミカです。よろしくマキさん！」

元気ハツラツに僕の妹は手を広げマキに抱きつこうとしたが、マキはひよいとよけた。

よろけた妹は何事もなかったようににこやかに振り返り、

「お茶でも入れてきまうす」

と言って台所に向かった。

妹のナミカが台所に去ったのを確認し、マキは僕に詰め寄った。

「甲斐に妹がいたなんて聞いてないわよ」

「僕もだよ」

僕の名前は甲斐正人。

目の前で怖い顔をしているのが神岡マキ。

高校時代から12年来の腐れ縁である。

僕は売れない画家で森の中に住んでいる。

マキが働いている画廊に僕の絵を置いてもらっているが未だに売れたことはない。

そんな僕の生活費は父の遺産。

会ったことのない父は僕に数年生活できるそこその遺産を残した。母子家庭で育った僕は父のことを何も知らなかった。

そして、母は多くを語ることもなく既に亡くなっていた。

だから、その遺産は僕にとって突然降って湧いたお金だった。

生きるために働くのか働くために生き続けるのかその意味すら分からなかった僕からそのお金は働く意味を失わせた。

働かなくても生きていける。

僕は深い森に建つ家を見つけ、安値で買い取り住み着いた。趣味で絵を描いていると、遊びにきたマキが絵を売ろうと言いつた。

売れない画家というより売れたことのない画家である。

それを画家と呼んでよいのか僕にはわからないので、やはり言いなおそう。

無職。ぷー太郎。ニート。

一番ニートが今っぽいので、とりあえずニートということにしよう。そして、ニート5年目の僕に「妹」ができたのだのはほんの3日前のことだ。

「知っているだろう？僕の母は未婚で僕を産んだ。父のことはよく知らなかったんだよ。腹違いの妹が一人二人いても不思議はないよ」納得いかない顔のマキに僕はにっこり笑ってみせた。

森の中にひっそり建つ僕の家遊びに来るのはマキだけだ。

マキ以外の人間がこの家に来ることはなかった。

その僕の家「妹」がいたのだ。

「本当に腹違いの妹なの？確かめたの？」

彼女の疑問はごもっとも。

「うーん。まあ…、でもそんな嘘く必要はないし…」

曖昧に言葉を濁す僕にマキはイライラしているようだ。

擦り切れた中古のソファに腰掛けている彼女の身長は僕よりちょっと高い。

座っていないければ微妙に見上げる事になる。

ストレートの黒い髪やすっと伸びる鼻筋は知的なイメージで、一般的にはきつと画廊がよく似合う。

もっとも僕の中ではマキは高校生のままで、僕をいじめるほうがよく似合っている。

「お待たせしました」

ナミカが足でドアを蹴り、トレイにコーヒーカップを三つのせて入ってきた。

それを見て、大きくため息をついたマキは何も言わずに立ち上がった。

「どうしたの？」

テーブルにコーヒーカップを並べるのを手伝いながら僕は立ち上がった彼女を見上げた。

「帰る」

「え？もう？来たばかりなのに？つまんなーい」

今時の女子高生の言葉づかいでナミカは口をとがらせる。

だけど、そんなナミカになぜか僕は違和感を感じていた。

マキは持ってきたバッグをつかむとナミカが入ってきたドアから出て行った。

僕がソファに座りなおすところにはもう車のエンジンが聞こえタイヤが砂利を踏みしめる音が聞こえて、遠ざかって行った。

「あらら…」

ナミカはマキの車が見えなくなった庭を窓から見ている。

庭と言っても砂利が敷き詰められ車が2台駐車できるスペースだけだ。

僕の中古の軽トラが停まっている以外何もない。

奥に森が広がるだけだ。

ナミカは森を見ているのだろうか。

そんなナミカを見ながら僕はナミカが入れてくれたコーヒーをすする。

「うまい…」

このコーヒーを飲まずに帰ったマキが気の毒になるぐらいナミカが入れたコーヒーは旨かった。

「ブルーマウンテン？」

ナミカの後姿に問いかけた。

彼女は庭を見つめながら、横に首を振った。

「じゃあ、モカ？」

「コーヒーは、地獄のように黒くて、死のように強くて、恋のように甘い…」

「は？」

僕はナミカが言った言葉の意味が分からずポカンとした。だから僕はもう一度繰り返した。

「モカ？」

「うん。インスタントのね。…それよりマキさん。怒って帰ったよ。いいの？彼女じゃないの？」

「…違うよ。それよりさ。そろそろ君が誰か教えてよ」

ナミカはまた窓から庭を見る。

「それは大事なこと？」

その声は消え入りそうだった。

消え入りそうだけど、強い口調だった。

「大事なことだと思うけど…」

だから、僕の声は自信がない。

彼女が僕の家に来て3日が過ぎた。

僕が彼女に出会ったのは、「ある日、森の中」。

彼女は森の中を歩いていて。

びしょぬれの泥だらけで地味な白いシャツとチノパン姿。足を引きづり、短い髪は濡れ、疲れ切った表情だった。

そして、僕と目が合った瞬間、彼女は倒れこんだ。

『お願い。警察には行かないで…』

と言が残し…

僕はいろんな想像をした。

一番考えられたのは、自殺だった。

事故や事件に巻き込まれたなら、警察に行って家に帰ろうとする。だが、彼女はこの森の中のぼくんちに住みつこうとしている。

僕のカップからコーヒーの茶色い闇が消えた。

底の見たカップを置き、マキのために入れられたコーヒーに手を伸ばした。

マキのために入れたコーヒーは冷めていた。

3

3日前。

太陽は沈みかけていた。

電灯などないぼくんちの周りは夜が早いのだ。

もともと体育会系ではない僕が1時間もかけて、意識のない彼女を僕の家までおぶってきたのは体力への挑戦に近かった。

何とか僕は鍵のかけられたこともない裏口のガラス戸を引いて、彼女を僕の家に入れた。

「はぁ~~~~~~~~。重かった」

女性に禁句な言葉も大声で言えてしまえるぐらい体力の限界ぎりぎりだった。

「さて…」

どうしようか…

ぼくんちは携帯は圏外なので持ってもいない。

パソコンもないが、かろうじて滅多に鳴らない固定電話があった。

救急車を呼べば、それは彼女の『警察には行かないで』との願いを聞き入れたことになるが、それは屁理屈だ。

救急車を呼べば、彼女の警察には知られたくないという願いは叶わないだろう。

だが、医者知識のない僕は彼女が怪我しているか見当もつかない。ただ彼女の体は冷え切っているのは確かだった。

「ま、ま、と、とりあえずは…」

女性の服を脱がせるのが得意ではない僕は、頭の中で言い訳をしながら、何とか彼女の濡れた服を脱がせ、体を拭いて、僕の服を着せ、僕のベッドに寝かせた。

そこで僕のなけなしの体力はついに限界を迎え、警察とか救急車と

か呼ぶかどうかの問題も中途半端に、そのまま床に突っ伏して寝てしまった。

「おはよ」

聞きなれない女性の声で目を覚ました。

声の主は僕のトレーナーとスウェットパンツをはいて、両手にはマグカップを持っていた。

足も引きずっている様子もないし、顔色もいい。

僕に彼女にかけたはずの毛布がかかっていた。

「賞味期限切れのホットミルクだけど」

そう言って、僕にカップを一つ渡してくれた。

「悪かったね。でも、2〜3日平気だろ」

そう言って僕はホットミルクをすすった。

彼女は擦り切れた中古のソファに座って、同じく賞味期限切れのホットミルクをすすった。

沈黙の中に2人のミルクをすすする音が響いた。

ホットミルクは喉を温め、胃に入り込み、ゆっくりと僕の体を温めてくれた。

カップの中をじっと見ていた彼女はゆっくりと顔をあげた。

「この家って、一人暮らしだよな？」

僕は頷いた。

一人暮らしの男の家に女子を泊めたのはまずかったかな。

「テレビないんだね。パソコンも。それに、時計もない…」

「必要ないからね」

「おじさんって画家？あっちの部屋に書きかけの絵があったけど…」

「おじさんって言うな。お兄さんと呼べ」

彼女と一周りの差はありそうな気がするが、僕はかろうじて20代だ。

「わかったよ。お兄さん。なら、私は妹ね」

「はあ〜？そう言う意味じゃなくて…」

「お兄さん。きっと私たちは生き別れの兄弟だよ」

「はあ？だから、どうしてそうなるんだよ。そんなわけないだろ」

「どうして？どうしてそんなことが言い切れるの？あなたは自分の母親や父親の過去を100%知っているっていい切れる？」

突然の強い口調に、僕は言葉に詰まった。

そんなわけがない。偶然、森で出会った少女が自分の妹のはずがない。

だが、100%ではない。

「…そうだな。わかったよ」

僕は溜息をついてカップをテーブルに置いた。

「今から君の服を洗うよ。その服が乾いたら町にある駅まで車で送ってあげるから後は自分で帰るんだ。妹よ。わかったか？」

「あつそ。わかったわ。町に行ったら、警察に駆け込んで、あんたが私に変なことをしたって言うからね」

「はあ？な、なにを言いたすんだ？言っておくが、僕は何もしていない…」

昨日の彼女の裸体が目に浮かんだ。

そして、僕の心臓がビビりだし、ドンドンと僕を叩き始める。

どう考えても僕は悪いことをしていない。

感謝されてもいいはずだ。

なのに、どうしてそんな脅しを受けるんだ！

「だいたい君の方こそ警察に行きたくないって…！」

「そんなこと言ったかな？」

悪魔は微笑んだ。

「町には一人で行ってね。それで、私の服と布団を買ってきてね。もちろん下着もね。お兄ちゃん」

「あんなあ。本当に変なことするぞっ」

「いいよ。別に…」

悪魔は少し悲しそうに目をそらした。

悪魔のくせにそんな目をしないほしい。

きつと、僕が普通の暮らしで、まともな神経をしていたなら、きつとこんな無茶な要求を聞かなかったかもしれない。

「妹になんか手を出すか。ばか」

僕はそう言っ、人差し指で妹のおでこをはじいた。

妹は少し驚いたように僕を見つめた。

「…で、妹よ。名前ぐらい教えてくれよな。僕は甲斐正人」

しばらく間をおいて、妹は小さな声で「…ナミ、カ」と呟いた。

その名前が本当かどうかは分からない。

ただ言えるのは、3日前に警察には言えない事情を抱えた生き別れの妹が僕にできたってことだけだ。

今日の森は少し騒がしかった。

ナミカと出会ってからなかなか散歩に行けなかった。

今日は4日ぶりの散歩だ。

僕は森を見上げた。

今日は何かが違った。

遠いどこかでざわざわとざわめいているような気がする。

森が響いている。

人の気配を感じて森が響いているような気がする。

僕は散歩を切り上げ、家に帰ることにした。

家に戻るとマキの車が見えた。

マキはいつも自宅のある街から3時間以上かけて予告もなく来る。

それは不定期で月に1回のこともある、毎週来ることもある。

でも、2日続けては珍しい。

マキがコーヒーも飲まずに帰ったのは昨日のことだ。

僕はマキの車の横をすり抜け、ガラス戸を開こうとした。

僕の家には、一応玄関があるが、庭に面した大きなガラス戸がいつの間にか玄関の役割をはたしている。散歩コースからは玄関まで回るより便利なのだ。

「売れたわよ！」

ムツとして帰った昨日のことなどすっかり忘れたようにマキが満面の笑みでガラス戸を開きながら叫んだ。

「売れたって。何が？」

「お兄さんの絵だって」

答えたのはナミカだった。

続けてマキが興奮していった。

「5年目快挙！」

「5年も売り続けてようやく売れた絵のお値段は？」

ナミカが余計な質問をした。

「別に僕は売るために絵を描いているんじゃないからいくらでもいいんだよ」

と言いつつ、気になる僕にマキがピースをする。

「2百円？」

余計なことを言うナミカに突っ込みをいれ、僕は冷静に答えた。

「額縁の代金より安いだろ。2万円ってところだろう？」

「2千円」

マキはピースしたまま答える。

ガクリとうなだれる僕にマキが不満そうに言った。

「あのねえー。2千円でも甲斐の絵を欲しいって言った人がいるんだよ」

「そうだ。そうだ。あんなの2百円でも高いのに」

ナミカが余計なことを付け加えた。

「まあ…。とにかく来週の土曜日空けといてよね。納品をするからちゃんとお客様に挨拶するんだからね。って、いつも甲斐の予定は空いてるか」

「やだよおー。僕がそんなの苦手なの知ってるよね。代わりに挨拶しておいて」

「駄目だよ。いつまで森の中に籠っているつもり？そろそろ外に出ないと…。貯金だってそろそろ無くなるでしよう？」

なるほど。彼女の目的は挨拶と言うより僕を社会に戻すことだろう。森の中に住んでいる僕が外に出ることは滅多になく、せいぜい食料を買いに車で1時間かけて一番近くの町のスーパーに行くのが関の山だった。

「いいよ。僕は…」

僕はマキを微妙に見上げ、溜息をついた。

「よくない…」

それっきりマキは黙ってしまった。

本当に僕はどうでもよかった。

確かに遺産と言っても一生暮らせるだけの財産はなかった。

この家は森の中にあり、ここから町まで車で1時間以上かかる。

しかし、その小さな町で仕事を見つけることは不可能に近い。

こんなところに家を建てたのは誰だか知らないが、本当に不便なところだ。

近くにスキー場があるわけでもなく、観光地があるわけでもない。

ここに一生住むのは不可能だった。

「私。好きだよ。お兄ちゃんが描いた絵」

沈黙を破ったのはナミカだった。

「綺麗だと思う」

「200円でも高いって言ったのはお前だろう？」

僕は冗談交じりに笑ったけれど、ナミカは笑ってなかった。

「だって、あれは1枚だけ買っても駄目だから…」

「どういう意味？」

意外そうにマキは聞いた。

僕の絵は単純な風景画だ。

森の木々を描いている。

季節ごとに見せる森の表情を描いている。

「一枚だけ見ても本当の森がわからないけど、何枚か見ていると徐々に森にもいろんな顔があるんだなあ。って気がつくんだよね…。うまく言えないけど」

僕にはナミカという人間が理解できなかった。

明るくてお調子者のようにも見えるし、静かな大人しい人間にも見える。

女子高生のようにも見えるし、二十歳すぎたしつかり者にも見える。どれも不自然で作っているようにも見えるし、本気のように見える。

今のナミカも演技に見えるし、本音を言っているようにも見える。

マキが静かに頷いた。

「そうだね。確かに甲斐の絵は1枚じゃ単純な風景画だけど何枚も見ていると森の表情が伝わってくるような気がする。連作絵画のような感じかもしれない」

「1枚じゃ価値無いみたいだな。じゃあ、抱き合わせてもっと高値で売ろうか？」

何とかこの空気を変えようとした冗談にマキは僕を睨みつけた。

僕はそのきつい目に耐えられず、目をそらした。

「わかったわ」

マキはそう言う Glas戸から出て行った。

「マキさん。お兄ちゃんのこと心配していたよ」

僕がいない間に何を話していたのやら…

ナミカが僕を非難じみた顔で見る。

「知っているよ。ずっと僕は彼女に心配しかかけていないからね」

そろそろ聞こえるはずの車のエンジン音が聞こえない。

代わりに裏口の Glas戸を叩く音がして僕らは振り返った。

Glasの向こうにマキが布団を抱えて立っていた。

どうやら、居候がまた一人増えたらしい。

手が届かなかった。

もう少しだったのに：

「どうしたの？朝っぱらからぼおつとして」

マキが僕の顔をのぞきこんだ。

「別に：。ところで職場にはなんて言って休んでいるんだ？」

「風邪」

「：早く治るといいな」

「甲斐次第ね。絶対土曜日には連れて行くからね」

今日は水曜日だったような気がする。たぶん。

僕の家にはカレンダーすらない。

マキはこうなることを想定して布団まで持ってきていたのだ。

狭い僕の家は、居間と台所と僕の寝室とアトリエにしている4畳半しかない。

夜になるとナミカが布団を居間に敷いて寝ていたが、昨日からその隣にマキが寝ることになった。

マキはナミカが作った朝食を居間のテーブルに並べている。

台所にテーブルはない。

居間のテーブルで僕は食事をしていた。

「ナミカちゃん。料理上手ね。19歳の割にしっかりしてるわ」
19歳？初耳だった。

「甲斐と同じように母子家庭に育ったみたいよ。だから、家事は一通りできるみたいね。」

父親は死んだって聞かされて育ったらしいわ。

でも、父親が死んで遺産が少し入ってきて初めて自分に父親がいる

って知ったらしいの。

それが甲斐のお父さんね。

甲斐の父親を調べて、同じくお兄さんがいるって知って、それで来たらしいわ。

でも、お母さんには旅行しているって内緒で来ている…って言うていたわよ」

マキがナミカから聞かされた身の上話は嘘だろう。

ナミカは森の中からびしょぬれでやってきたんだ。

僕に会うためにびしょぬれになる必要がない。

「マキ。僕が父の遺産でここに住んでいることを話した？」

「ごめん。なんとなく成り行きで」

なるほど。それで咄嗟に嘘話を作ったのか。

でも、僕はナミカがマキについた嘘を否定する気になれず、ただ、僕の前に並んだ綺麗なオムレツとオニオンスープを見て溜息をついただけだった。

その溜息につられるようにマキも溜息について静かに言った。

「昔、お母さんに言われたわ。溜息一つつくといつ幸せが逃げるって」

「じゃあ、僕には幸せは残ってないよ。あの時から僕はずいぶん溜息をついちゃったからね」

「甲斐…」

マキが痛ましそうに僕に何かを言おうとした。

でも、それは、ドアの音に遮られた。

開いたドアからナミカが3つコーヒークップが並んだトレイを抱え入ってきた。

昨日と同じように。

「あれ？先に食べててくれてもよかったのに」

ナミカがテーブルにコーヒークップを並べる。

「いや。一緒に食べよう。僕たちの記念すべき朝に乾杯」

僕はそう言ってナミカが並べたコーヒークップを手にとった。

マキとナミカが僕に倣ってコーヒークップをかざし、微笑んだ。
「乾杯」

僕たちは同じ美術部だった。

僕と彼女がお互いに惹かれ合うのに時間はかからなかった。

運動が得意ではない僕が美術部に入ったのは、単純に絵が得意だったからだ。

将来、画家を目指していたわけではない。

でも、彼女は違った。

本気で絵を勉強し、将来は美大への進学も考えていた。

そして、美術部には3人の部員しかいなかったから、僕たちはいっ
も一緒だった。

僕とマキと、そして、彼女の3人だけだった。

僕の肩にそっと手の感触があり、僕は振り返った。

するとマキの人差し指が僕の頬に突き刺さった。

僕の頬に人差し指を突き刺したままマキが僕を見て呟く。

「ぼくか」

「…知っている」

「寒いよ」

「…知っている」

僕たち二人は朝食を終え、森に散歩に来ていた。

「家に残ったナミカちゃんは賢いね。こんな寒い朝に散歩に出るな
んて。本当におバカ。夏はとくに終わっているんだよ」

「だったら、マキも来なければよかっただろう？」

「私もバカなの」

そういうと僕たちはまた黙って森の中を歩きだした。

森の中のいつもの散歩コース。
遊歩道などない。

このいつもの散歩コースを外れると5年以上森に通う僕でも遭難するだろう。

僕とマキの足音が森に響く。

風が森を揺らす。

遠くで鳥のさえずりがする。

いつもと同じはず。

だが、やっぱり何か騒がしいような気がする。
日に日に騒がしくなっているような気がする。

「最近。描いてないんじゃない？」

マキが少し後ろからぼつりと呟いた。

「そうかも…」

ナミカが来てから描いてない。

描く気がわかないのだ。

働いていたのは生きるためだ。

でも、描くのは生きるためではない。

描かなくても生きていける。

なぜ描いていたのか：

暇つぶしだろう。

他に何もすることなどないのだから。

僕は暇つぶしに来る日も来る日も森の絵を描いていた。

その行為に意味などない。

「ねえ…」

マキから小さな声が聞こえた。

「もう十分でしょう？」

「……」

「もう許してあげなよ。自分を…」

僕は振り返らずに歩き続けた。

「早くため息つくのをやめてよ…。まだ残っているから…。幸せ…」

網膜の残像には彼女の手のひらが焼き付いている。

僕を許してくれるのか？

彼女の手のひらをつかめなかった僕を許してくれるのか？

僕たちが家に戻るとナミカが昼食の支度をしていた。
裏口のガラス戸は台所に直結している。

その奥に居間がある。

僕たちが台所に入るとナミカが嬉しそうに言った。

「今日はシチュー作ったよ」

ホワイトシチューの匂いを嗅ぎながらこのナミカの笑顔は本物だろうかと考えた。

「あゝ。いい匂い。ちょっと味見させて」

子供がおねだりするようにマキがナミカのそばによる。

「ちょっとだけだからね」

まるで母親のようにナミカが小皿にシチューを取り分けた。

暖かなシチューの優しい匂い。

二人の笑い声。

どこかで、ずっとこの瞬間が続けばいいのと思う僕。

僕の奥底にある罪悪感がじわじわと心臓を締め付け、僕は一人居間に入った。

居間に入るとすぐに滅多にならない固定電話が鳴った。

電話の相手はマキの同僚だった。

携帯が繋がらない僕の家の一の通信手段である固定電話の番号をマキは念のために親しい同僚に教えたのだろう。

「支配人以外、私が仮病だって知っているの」

そう笑いながら、マキは受話器を置いた。

「ちょっと急ぎの仕事が入ったから、お昼を食べたら戻るわ。でも、またすぐに来るから安心してね」

曖昧な表情をする僕とは裏腹にナミカは本当に淋しそうな表情を浮かべた。

この表情は本物なのかやはり僕にはわからない。

「美味しいね。シチュー」

マキはスプーンをふうふうしながらナミカに言う。

その言葉にナミカはひどく大人じみた微笑みを浮かべる。

「お兄ちゃんはどうして風景画しか書かないの？人物画とかは？」

「だって、この森にはモデルがいらないし」

「あ。だったら、今は2人もいるじゃん！」

急に子供じみたいたずらっぽい表情でナミカが自分とマキを交互に指差す。

「創作意欲が…」

僕は二人同時に睨まれた。

人を描いてしまうと、その人の一瞬しか残らない。

本当は笑っている顔も泣いている顔も怒っている顔も全てがその人なのに、絵を見る人にその人を全てを伝えられないのがひどくもどかしく感じるのだ。

見る人はそれをわかっている。

見る人はその一瞬にしか興味はない。

見る人は真実を知りたいわけではない。

でも、それでも僕はいやなんだ。

昼食を終え、マキの車の後姿をナミカがじっと見ていた。

車が去った後も森を見ていた。

ナミカがガラス戸の外の森を見ているのは昼よりも夜が多かった。

ぼんやりと真っ暗な森をガラス戸を通して見ていた。

ナミカがここにきて明日で一週間目。

もし自殺なら、家族は心配しているだろう。

そろそろ帰った方がいいのではないだろうか。

自殺なら…

いっそ死ぬることができたなら、どれだけ楽になれただろうか…？
生き続ける意味を問われたら、僕はこう答えただろう。

死ぬのが怖いから、と。

僕は臆病者だ。

死ぬことも怖くて、生きていくのも辛かった。

死にたいという「重い」が強くなれば、同時に生きたいという「重い」が天秤のバランスを保とうと量を増す。

種を保つために脳に組み込まれた自衛プログラムなのか。

でも、今の僕は、どちらでもない。

生も死も動いていない。

「なあ……。ドライブでもしようか？ 軽トラだけど……」

僕はナミカの後姿に聞いた。

ナミカは首を横に振る。

ここにきてナミカは外に出ようとしなかった。

僕の買ったセンスのかけらもない地味なトレーナーと地味なパンツと地味な生活。

「ここにはテレビもパソコンもない。つまらないだろう？」

またナミカは首を横に振って呟く。

「そのほうがいいよ」

そして、ようやく振り返って僕に笑った。

「本があるから退屈はしないよ」

取り立てて読書家でもない僕でもそここの本は持っていた。

ほとんどが5年以上前のベストセラーとか5年以上前の雑誌とかだけだ。

「どうしてパソコンは持ってこなかったの？」

「最初から持ってなかったんだ」

「どうしてテレビは持ってこなかったの？」

「この家にアンテナがなかったからだよ」

「なら、どうして5年前のザテレビジョンは持ってきたの？」

どこから見つけたのか、レモンを持ったアイドルが表紙の雑誌を持ち上げ、笑顔に戻ったナミカが笑いながら聞いた。

「あれ？」

引越しするときに紛れたらしい。

笑った僕にナミカは口元に笑みをたたえたまま優しくきいた。

「淋しくなかった？」

僕はうろたえた。

「別に…」

「きつとね。それはマキさんがいたからだよ。マキさんはお兄ちゃん
の生きる理由だから」

年下の得体の知れない少女は僕が心の中で否定してきた言葉を声に出した。

だから、僕も声にした。

「ナミカの…、生きる理由は…？」

「私の…？」

ナミカの笑顔は固まり視線は食器棚に向かう。

食器棚のガラス戸は外の光を反射してナミカの顔を映し出していた。
ナミカはジッとその中に映る自分を見ていた。

「私の生きる理由は、もう一人の自分…」

僕はその時気付いた。

ナミカは窓の外の森を見ていたのではなく、窓に映る自分を見ていた。

窓に映る自分の向こうにいるもう一人の自分を見ていた。

「もう一人の自分？」

「そう…」

「双子？」

コクリと頷いたナミカはひどく辛そうな顔をする。

「死んだの？」

言いにくいことを簡単に言葉にしてしまっただけから僕は後悔した。

「死んだし…。死んでないし…。でも、殺した…」

意味の繋がらないナミカの言葉の続きはなかった。

僕はこれ以上この会話を続ける勇気がなかった。

僕たちにはお互い触れられない傷があった。

お互い気づきながら触れないようにしていた。

外界との繋がりを避けるように暮らす僕。

そこに逃げ場を見つけた僕の「妹」。

本当の兄弟のようにひっそりと暮らせたなら：

ただそこは幸せとは程遠い不毛な空間かもしれない。

遠い昔、僕たちはよく夢を語り合っていた。

マキは、デザイナーになると言っていた。

彼女は、画家になると言っていた。

僕は、ちゃかしてお嫁さんになると言っていたような気がする。

「ねえ、ケイコって誰？」

朝食を食べながら、昨日の続きのようにナミカがまた答えづらい質問をした。

「どうして？」

「昨日、うなされていたから……」

そう言えば、昨日、夢を見ていた。

実際には彼女の夢を見ない日はない。

もしかしたら、毎晩、うなされてその名前を声に出していたのかもしれない。

一週間目にしてナミカは覚悟して聞いたのだろうか？

僕はできるだけそっけなく答えた。

「12年前に僕が殺した僕の彼女」

「……」

僕はお味噌汁をかき混ぜながら小さなゆらゆら揺れるワカメを箸でつかもうとして失敗した。

「知りたい？」

味噌汁を飲み干し箸をおいてナミカを見つめた。

ナミカの箸はほとんど進んでいない。

「……知りたいけど、知りたくない」

「それを知ってもナミカには何の意味がない。ただ、知らなかった

時には戻れない。

他人に対して知らないふりをすることはできるが、自分に対してはそんなことはできない」

「わかってるよ。だから、知りたいけど、知りたくないの」
長い沈黙の中、車が砂利を踏みしめる音がした。

マキの車だ。

ガラス戸が開く音がしてマキが居間に入ってきた。

「おかえり」

そう笑顔で言ったナミカにマキはぎこちない笑顔を向けて、

「ただいま」

と返した。

「あのなあ、ここはぼくんちだから」

明らかにマキの表情は強張っていた。

「：何かあったの？」

「別に：、それより朝の散歩しましょう！」

突然、言いだした。

「マキさん。朝ごはんは？」

「食べてきたから大丈夫。ナミカちゃんも散歩する？」

ぎこちない笑顔でナミカも誘った。

そのマキの笑顔に何を見たのか：、ナミカも笑顔で返した。

「やだよ」

「：そうよね」

「だって寒いんだもん」

「寒い：からね」

僕とマキは二人で寒い森を歩きだした。

森の中のざわめきは昨日よりもさらに大きくなっている。

僕の後が続いていたマキがぽつりとつぶやいた。

「この森には川があるの」

「知っているよ。散歩コースではないけどね」

「その川の上流にはダムがあるの」

「そこまで行ったことはないけどね…。何が言いたいのか」

マキの様子は明らかにおかしい。

「昨日ね…。急な仕事で画廊に寄った時にね。お客様に聞いたの。」

そのダムで発砲事件があったんだって。

犯人は女子高生で…。その女子高生は、麻薬の密売にも絡んでいたの…」

僕は立ち止まった。

「その女子高生が、ナミカだと…?」

マキの目がおびえていた。

僕はよほど怖い顔をしたに違いない。

ゆっくりとマキは言葉を選んで言った。

「その女子高生はまだ見つかっていない。ちょうどナミカちゃんが来た日に事件は起きている。」

ねえ。本当に腹違いの妹なの? ナミカちゃんは…」

発砲事件? 麻薬の密売?

「まさか…」

でも、だから、森が騒がしいのか。

ナミカを探して警察が徐々に下流に搜索範囲を広げているのか?

僕の心臓が僕を叩きだし、僕の足は来た道を走りだした。

何も言わず、走り出した僕の後ろからマキも僕の後を追うように走り始めた。

「え？どうしたの？」

走りながらマキは僕に聞いた。

「家に戻る。ナミカがマキの様子が変な事にきつと気づいたはずだ」
「え？気づいているようには見えなかった。大丈夫だよ」

僕の後を追いながら、マキは叫ぶ。

ナミカにとってテレビもパソコンも来る人もいない僕の家はちょうどよい隠れ家だった。

だけど、いつか終わりが来ることを知っていた。

じつと僕やマキの様子を観察していたに違いない。

僕ではなく、散歩を嫌がっていたマキが僕たちを散歩に誘った意図を察したに決まっている。

そして、ナミカが散歩を断った時のマキの返事、『そうよね』の後に続くマキが心にしまったセリフ。

それは、『外には警察がいるかもしれないのにね』。

ナミカにはきつと聞こえたはずだ。

「僕とナミカは同じなんだ」

走りながら、僕は独り言のように言った。

僕とナミカは罪を背負っていた。

そんな意味で似ていた。

似たものの兄妹。

「同じ人殺しだ」

「違う！」

大きなマキの言葉が森に響いた。

しばらく静かになった。

走りながらマキは何を考えていたのだろうか。

「そうね…、きつと何かわけが…、ああ、どうしよう…」

マキのそんな独り言が少し続き、後は息遣いのみが聞こえた。

家に戻ると僕とマキはすぐにナミカを探した。

僕の狭い家に誰もいないことを確かめることに時間はかからなかった。

一週間、散歩のためにすら家を出ようとしなかったナミカが家の中から消えた。

「どうしよう……。私のせいだ」

両手で顔を覆ってマキが泣きだした。

「探そう。1時間も過ぎていない。そう遠くは行けないはずだ」泣きながらマキが頷いた。

この家には自転車はない。

軽トラはあるが、それは庭にある。

ナミカには歩くしか移動手段はない。

「私は車で道路を探す」

「僕は森を探すよ」

「森に入るわけがないわ。やっぱり、警察にお願いしましょう」

「だめだ」

「森に入ったのなら、早く見つけないと遭難するわ。今は彼女の命の方が大切よ」

「頼むから、夜まで待ってくれ」

「あなたまで遭難するわ」

「でも、探しに行くよ」

もしかしたらナミカは、僕に手を伸ばし助けを求めていたのかもしれない。

ずっと、伸ばした手を掴んでほしかったのかもしれない。

景子が伸ばした手を掴めなかった僕に、再び差し伸ばされた手のひら。

警察より早く見つけなければ……

僕がナミカの手をつかまなければ。

高校3年生になった僕たちの夏は、始まることはなかった。

夏休みを前に美大の受験を控えた景子と就職が決まった僕はすれ違い始めた。

たまに景子の家に行くと、デッサン画が破り捨てられ散乱していることも少なくなかった。

「僕は景子の夢を応援しているよ」

そう言って彼女を励ました。

けれど、僕のどんな励ましの言葉も景子にとっては重荷のように思えた。

受験と恋愛の両立は難しいのかもしれない。

しばらく会わない方がいいかもしれない。

そう思い始めたところで、景子の両親から、『しばらく距離を取ってほしい』と言われ、僕は了承した。

景子の父は画家であり、母は服飾デザイナーだった。

二人の期待に僕の期待まで乗つけたら、景子がかawaiiそうに思えた。僕は既にデザインの専門学校に進学が決まっていたマキといつも遊ぶようになった。

その時、僕は何も知らなかった。

『妊娠したの。だから、もう受験はやめて甲斐くんと結婚する』

夜遅くかかってきた携帯電話でそう告げられ、僕は動揺した。

景子のことは本当に好きだった。

結婚したかった。

でも、それは今ではなかった。

それに、妊娠という言葉が大きく僕にのしかかった。

「わかった…」

僕に言えたのは、それだけだった。

父がいなかった僕は母をつれ、彼女の両親に挨拶に行った。

母は玄関で景子の両親を見るなり、土下座した。

僕の母は何より母子家庭ということにコンプレックスを持っていた。

『母子家庭だから』

そう言われることに母は何より敏感に反応し、僕は人より厳しくしつけられた。

母は僕が生まれると夜の仕事は辞め、必死で生保の営業をしながら僕を育ててくれた。

経済的にも困ったことはなかった。

景子の父はそんな母を怒鳴り、何度となく『母子家庭』という言葉

を口にした。

泣きながら景子は訴えた。

「どうして？ どうして誰も喜んでくれないの？ 私たち何も悪いことしていない」

「景子。今はもっと大事なことがあるだろう？」

「もっと大事なこと？ 何？ それは何？」

「それは…」

「お父さん。お母さん。結婚できないなら…、子供が産めないなら…、私、死ぬ」

そう言って、景子は靴もはかずに玄関を飛び出した。

僕たちは景子を追った。

景子の家のそばには大きな橋があり、川があった。

川には闇が流れていた。

電灯の光がチラチラと闇に合わせて流れていく。

橋の真ん中までくると景子は僕たちを振り返り、橋の手すりに上った。

「イヤー——」

景子の母親の半狂乱になり悲痛な叫び声が響きその場に座り込んだ。

「景子。落ち着きなさい」

景子の父は震える声で娘に嘆願した。

不安定な手すりの上に立ち上がった景子は僕を振り返った。

何も言葉の出ない僕に景子は何も言わず手すりの上から手を伸ばした。

僕はその手のひらに向かい、自分の手を伸ばした。

でも、届かなかった。

「ナミカ！」

僕は名前を叫びながらざわめく森の中を歩きまわった。

「ナミカ！どこだ！くそっ」

石に躓いて僕は膝を擦りむいてしまった。

もともとどんくさい僕は転んでばかりで前になかなか進めなかった。

「ナミカ~~~~」

森はざわざわと僕の声をかき消そうとする。

散歩道以外は歩かない僕は、すでに迷っていた。

自分がどこにいるかもわからず、ただ前へ前へと進んで行った。

朝の寒さが嘘のように僕は暑かった。

心臓はずっとバクバクしっぱなしだ。

12年間、僕の心臓はただ僕の生命維持装置のように淡々と時を刻んできただけだった。

なのに、ナミカがきてから調子が狂っている。

「ナミカ！出て来い」

川に飛び込んだ景子を追って、僕も川に飛び込んだ。

そこは町でも一番大きな川だった。

梅雨のせいで水量も多く水は冷たくて、僕はただ溺れたただけだった。

そして、僕は助かり、彼女は助からなかった。

彼女の両親は僕を許さなかった。

葬式に出ることも拒まれた。

彼女をなくした実感を何一つ持てないままの僕は、涙を流すことすらできなかった。

ただ、手のひらが、彼女の手のひらが、フラッシュバックのように、何度も何度も、僕に助けを求めるように、僕の目の前に浮かびあがっては消えた。

マキは学校をずっと休んでいた。

そして、僕はマキにも逢えないまま夏休みになった。

メールも一度も返事は来なかった。

夏休みが終わった後、マキは学校には来たけれど僕が話しかけても無視された。

マキの友人が僕にそっと教えてくれた。

マキが僕に好意を持ってくれていた事を。

それが景子を刺激していた事を。

マキと景子の関係がぎくしゃくし始めていた事を。

マキの友人は淋しそうに言った。

「誰も何も悪いことしてないのにね…」

僕たちが昔のようにやく友達に戻れたのは、高校を卒業してから数ヵ月後のことだった。

何事もなかったようにメールがあり、何事もなかったように会って、何事もなかったように元に戻った。

そうして、マキは、僕の唯一の友達になった。

昔のように冗談を言ったりできる仲に戻ったが、昔と同じではない。お互い触れられない、触れてはいけない傷を共有していた。

この12年間、マキには何人かの彼氏ができたようだったが、どれも長くは続かなかったようだ。

僕はマキの気持ちに気づいていた。

その気持ちに答えたいと思うたび、まぶたの裏に残った景子の手のひらが僕の心を押し止めた。

景子をあんな形で失くした後、僕は、僕が生き続けたのは、母のためだと思っていた。

母をこれ以上悲しませたくない、ただそれだけだと思っていた。

しかし、高校卒業後、長年の無理がたたり母は亡くなった。

そんな生きる理由を失った僕の前にふっと現れ、そして、何も言わず僕のそばにいてくれたのはマキだったのに、僕は彼女に何もしてあげることができなかった。

そして、父の遺産が手に入り僕がしたことは、最悪だった。

きつとマキは悲しんだに違いない。

何一つ、立ち直れていない僕をどんな風に思ったのだろうか。

それでも、生きる理由もないのに、そんな風にでも生きていこうとしたのは、やはりマキがいたからなのかもしれない。

ナミカは、マキの存在が僕の生きる目的だと言った。

それが正しいのかもしれない。

でも、それでも、僕には何もできなかった。

ふと布団を持ってきたマキの姿が頭によぎった。

マキはずっと僕の家に来たかったのかもしれない。

ただ遊びに来るのではなく、布団を持って来たかったのかもしれない。

僕を画廊に連れて行くためというのは口実で、ナミカと僕が二人になることを心配して布団を持ってきたのかと思ったが、そうではない。

本当は、ただ布団を持って来たかったのかもしれない。

マキは嬉しそうだった。

そんなマキを見ると、僕も嬉しかった。

だから、ナミカと三人で食べたシチューが何だかとっても美味しかったんだ。

「いないよ！何も知らないくせに！」

方向に間違いはない。

だが、まだ姿が見えない。

「だったら、教えろよ！」

背丈ぐらいの崖をよじ登ると、そこにナミカが膝を抱いたままこっちを見ていた。

「知ったら、知らなかったときには戻れないよ…」

泥だらけの顔で僕を見ていた。

そして、目に涙を一杯溜めて僕に言った。

「バカ…。なんで来るの」

僕はそっとナミカの肩に手を置いた。

その肩は冷え切っていた。

僕は来ていたジャケットをその肩にかけ、ゆっくりとナミカを抱きしめた。

「バカ…。妹だからに決まっているだろう」

差しのべられた手をちゃんと掴みたかった。

今度こそ。

木々の隙間からキラキラと光が降り注いできた。

そして、僕たちを包み込んだ。

柔らかな光で。

家に戻るとマキがガラス戸の前で待っていた。僕たちの姿を見つけると泣き崩れた。

完全に道に迷った僕たちが家にたどり着いたのは夕暮れだったから。マキは車で人が行けそうなところを探しまわったか、そんな場所はそう多くはない。

結局、この家に戻り、警察に電話することもできずにマキはただただ待っていた。

泣きながらナミカに抱きついたのはマキだった。

「あんな態度取ってごめんね」

マキは自分の態度でナミカを追い詰めたと後悔していた。

12年前の態度が景子を追いこんだことを後悔したように。

ナミカは自分の本当の名前とここに至る経緯を教えてくれた。

「双子だったの…。でも、中身は全然違っていた。

妹は明るくて素直で頑張り屋で、何でも一番を取ったの。

勉強も。運動も。私はまねできないと思った。だから、わざと優しくしたの」

「わざと…?」

「子供って結構したたかなんだよね。どうやったら、自分が愛されるか考えるの。

一番簡単なんだよね。優しい振りするのって。

常ににこにこ笑って、たくさん親のお手伝いして、ほんのちょっと欲しいものを我慢する。

ただそれだけ。でも、その内、何が本当で何が嘘か分からなくなる」
本当のナミカが僕にはわからなかったけれど、ナミカ自身にも分かったのだ。

それから、ナミカはなぜ自分が麻薬密売にかかわったのかを僕たち

に話してくれた。

そして、最後に、発砲事件のあったダムで双子の妹との再会を話してくれた。

「私は警察にも麻薬組織にも追われて、ダムに行きついた。

橋の手すりに上って死のうとした自分に、妹は手を差し伸べてくれたの」

「でも、私は、その差しのべられた手を取らずに川に落ちた…」

「どうして、手を取らなかった？」

「わからない。ただ、落ちた時、川に体を叩きつけられて、深い川底に吸い込まれそうになっても、私の意識はあった。そして、死にたくないって、強く思ったの。だから必死にもがいて、気がついたら、川の下流の岸が上がっていた」

その手を差し伸べた妹はきつと後悔しているだろう。

掴めなかった手を、命を。

でも、ナミカは生きている。

ここに生きている。

泣きながら生きている。

「死ななかつたのは、たぶん、落ちる瞬間、手を差し伸べた妹が言ってくれたから…。大好きだよって…言ってくれたから…」

だから、必死で生きたのだ。

もし、あの時、僕もちゃんと気持ちを伝えられていたなら、景子も、もしかしたら、生きてくれたのだろうか。

「ナミカちゃんは返事したの？大好きだよって言ってくれた妹に返事したの？」

優しい声でマキが問いかけた。

ナミカは首を横に振った。

「じゃあ、今からでも遅くないわ」

「でも…」

「電話はしにくいよね」

マキは自分のバッグを取り上げるとノートパソコンを取り出した。

そして、固定電話のモジュラージャックを抜いてノートパソコンをつないだ。

「メールを送ったら、ちゃんと自分の帰るべく場所に帰ろうね」

ナミカが妹になんてメールしたのか僕は知らない。

でも、それは僕の知らない僕ではないきょうだいへの大切なメッセージだから、

それは、知らなくてもいいことだ。

「ねえ、ナミカちゃん。家に戻るのは明後日にして、明日はパーティーしようよ！」

「パーティー？」

ナミカと僕は声を合わせてマキに向きなあった。

「そう！卒業式！」

「なんじゃ、そりゃ…」

「いいの。ただ、パアッと飲みたい気分なの」

「ナミカは未成年だ」

「じゃあ、甘酒でも買ってくるよ」

そして、次の日。

僕たちは、森に繰り出した。

ざわめく森たちよ。

もう少しだけ、僕たちを隠しておいてほしい。

今日だけ。

ナミカが作ったお弁当を持って、いつもの散歩道を歩いていく。

「あゝるうゝ日、森のなああゝ。はい。続けて！」

僕は二人を振り返る。

マキは僕を無視して散歩道のわきにあるちよつと小高い丘を指差して言った。

「あこにしよう！」

「くまさあゝん…」

僕の小さな声を無視して、ナミカがさっさとシートを引いて準備をし始める。

気を取り直して僕は叫んだ。

「さあ、お花見だ！」

「はあ？もう、秋だよ」

マキが突っ込む。

「じゃあ、遠足？」

「そうだね。まさしく遠くまで足で歩いてきているからね」

ナミカが笑った。

僕たちは水筒に入れて持ってきたコーヒーで乾杯した。

ナミカの入れたコーヒーマキはやっぱり美味しかった。

愛されたくてお手伝いを頑張ったとナミカは言っただけで、それで料理もうまくなれないし、美味しいコーヒーマキも入れられない。

「才能だよな。このコーヒーマキは」

「コーヒーは地獄のごとく黒く、死のごとく強く、恋のごとく甘くあるべし」

笑いながらマキは言った。

どこかで聞いたような言葉だが、僕には思いだせなかった。

「何？それ？」

「トルコのことわざだよ。コーヒーは深くいつて意味。甲斐にはわかんないよ。」

それより、サンドイッチも美味しいね」

口いっぱいにサンドイッチをほおぼったマキになんとか失礼な事を言われたような気がしたが、まあ、いいだろう。

目の前に通り過ぎた赤い木の葉を手のひらで受け止め、僕は空を見上げる。

突然、ナミカが立ち上がった。

そして、叫んだ。

「ば~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~」

「おい。おい。まだ言うか？」

「違うよ。自分に言ったの。だってバカと言う奴がバカなんだよね」それを聞いてマキが立ち上がった。

「ばああ~~~~~かああ~~~~~。マキのばああ~~~~~か~~~~~」

そして、立ち上がった二人が僕を見下ろす。

はい。はい。さっきは僕の森のくまさんをバカにしたのにね。

僕は大きく息を吸い込んだ。

「バァアカァァァ~~~~~」

森に向かって叫んだ。

僕の叫び声は森に消えていく。

僕たちは、悲しい生き物だ。

答えの見えない未来に進んで生きていく。

それでも、進まなければ、答えを見つけられない。

僕の答えはここにはない。

それがわかったただけでも、僕は前に進めたのかもしれない。

そして、次の朝。

僕たちはガラス戸を開いた。

キラキラと眩しい太陽が僕を照り付ける。

「一週間ぐらいいしかなかったけど、もっとずっといたような気がする」

ナミカは振り返ったガラス戸に言った。

そのガラス戸にはナミカが反射している。

ガラス戸の中のナミカは笑っていた。

太陽の光を反射してガラス戸はキラキラと輝いている。

マキの車で僕らはナミカを町の駅まで送った。

駅前でナミカを下ろすと僕はなんて言っていないか分からず、

「おい！警察に駆け込んで変なこと言うなよ」
と言った。

「変なことしたの？」

マキが笑いながら聞く。

「してないって！」

心臓がまたどくどくしてきた。

そんな僕たちを見てナミカがふかぶかお辞儀をした。

そして、顔をあげて笑って言った。

「ありがとうございます。お兄さん。お姉さん」

「何それ…」

マキが呟いて、その意味を知って笑いながら顔を赤くした。

「あ。もう電車の時間だから。2時間に一本だから乗り過ぎすと大変！」

最後に大きく手を振って、ナミカは前に駆け出した。

「さてと、次はあなたの番ね」

「行くんだろう？ お客様への挨拶」

「やっぱりわかっていたのね」

「何年マキの友達していると思っっているんだよ」

「長かったね…」

「……」

マキの画廊へは初めていく。

その画廊はマキの遠縁がオーナーをしているのだ。

だから、画廊の片隅とはいえ僕の絵が置かれていたのだ。

画廊は商店街の一番端に静かにある。

最近、僕の心臓はフル稼働してばかりだ。

車を降り、前を歩くマキに声をかけた。

「2千円も出してくれたのだから感謝しないとな」

「本当は2千円って嘘よ」

「へ？」

「単にピースしただけ、2千円はその場のノリで言っただけ。でも、買うって言ってくれたのは本当。買ってくれる相手はとっても有名な画家よ」

それ以上、マキは何も言わなかった。

画廊の自動ドアが開いたさきに、2人のお客様がいた。

フル稼働していた僕の心臓は僕の時間もろとも止まった。

「ごめんね。言っちゃうと、絶対来てくれないと思ったから黙っていたの」

完全に止まった僕の前に歩いてきたのは、景子の両親だった。

二人は深々と僕に頭を下げた。

僕を見るなり、景子の母は涙を流した。

「ごめんなさい。甲斐くん。本当にごめんなさい」

全く理解のできない状況に僕は静かに頭を横に振った。

「本当に君には申し訳ないことをしたと思っているよ」

「意味がわかりません…」

ただ僕は吐き出すように言った。

マキは僕らを画廊の奥の応接室に通してくれた。

応接室には僕の絵があった。

森の絵だ。

森の木々をいっぱい描いた。

「ここで景子のお父さんに会ったのは本当に偶然だったの。それに、甲斐の絵を褒めてくださったのも偶然だったの。絵には甲斐の名前はつけてなかったから…。本当のことを言うべきか迷っていたら、お父さんに『この絵は何だか孤独すぎる』って言われて、黙っていらなくて…」

「でも…」

何が何だか分からない僕に景子の父親は言った。

「甲斐くん。君にはもつと早く言うべきだった。あの時、既に景子はうつ病だったんだ。僕たちが過度にプレッシャーをかけ過ぎたせいでね。医者にそう言われたけど、僕たちはそれを受け入れようとせずに、さらにプレッシャーをかけた。それで景子は君に逃げようとした。妊娠ももちろん嘘だよ…。僕たちは景子が死んだことを自分たちのせいだと認めたくなくて、全てを君のせいにして娘の死を乗り越えようとしたんだ…」

「でも、実際、僕のせいだし…」

僕は知っていた。

彼女が将来のことで悩んでいたことを、でも何もできなかった。

「この絵が君の描いた絵だと知り、そして、一人森の中で孤独に暮らしていることを知り、初めて将来ある若者に自分たちがしたことを知ってしまったんだよ…」

「そんなつもりじゃ…」

僕は景子の両親に責められたから森に住んでいたわけではない。ただ、弱かったから…」

「本当にごめんなさい。許して…」

ハンカチで顔を覆って景子の母親は泣いた。

「でも、死んだのは僕でなくて景子だから…」

親のほうが辛いのは当たり前のことだ。

しばらく沈黙が続き、景子の父親は用意してきたらしいセリフを言った。

「よかったら、本格的に絵の勉強をしないか？僕が援助するから、君には才能があるよ。僕の知り合いで…」

「あの…。本当にそう思いますか？」

ジッと景子の父親の目を見た。

「あの絵を気に入ったのは本当だよ」

正直な人だ。

僕ははっきりと言った。

「僕に絵の才能がないのはわかってます。それから、森を出ます。心配していただいてありがとうございます。もう十分です」

森は静かになった。

探し物が見つかったのだろう。

冷たい森の空気が僕を冷やしていく。

「あゝるうゝ日、森のなかあゝ」

僕の肩にそっと手の感触があり、僕は振り返った。

するとマキの人差し指が僕の頬に突き刺さった。

マキが僕の頬に人差し指を突き刺したまま唇を尖らせている。

「甲斐はバカだよ」

僕はマキの人差し指を頬に刺したまま答える。

「知っているよ」

僕はめげずに息を吸い込んで歌い始める。

「くまゝさゝゝんに、でえあゝあつたゝゝゝはい！マキも続けて」

「本当にバカ。早く引越しの準備しないと日が暮れるのに、のんびり散歩なんて」

「いいだろう？最後なんだから…」

「…そうだね」

ある日、森の中で、ナミカに出会うことはもうないだろう。

もしかしたら、彼女は僕たち作りだした幻だったのだろうか。

でも、また会える気がする。

その時はまた3人でコーヒーで乾杯したいな。

肩に置かれた君の手のひらが僕をゆっくりと温める。

だから、僕は安心できるんだ。

ほっとできるんだ。

僕は、僕の肩に置かれたマキの手に、僕の手のひらを重ねた。

「痛いよ。マキ。そろそろ人差し指をどけてくれないか？」
「ばか」

これから、森は冬を迎える

そして、春を迎え、夏を迎え、また、秋を迎える。

森は静かにいくつもの季節を迎えては、送り出していく。

おわり

17 (後書き)

長い間、お付き合い下さりありがとうございました。

これは、実は、私が既に投稿しているものの番外編的な話です。

「ナミカ」の過去に消化不良を起こされた方はそのお話しを読んでいただければ嬉しいです。

そのお話に、ピンときた方には、きっと明日良いことが起きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0372r/>

手のひら

2011年10月4日19時53分発行